

霍公鳥を詠む歌二首

三九〇九番

橘は常花にもが ほととぎす 住むと来鳴かば 聞か

ぬ日なけむ

三九一〇番

玉に貫く 棟を家に 植ゑたらば 山ほととぎす 離れ

ず来むかも

橙橘初めて咲き、霍公鳥翻り嬰く。この時

候に对ひ、詛志を暢べざらめや。因りて三

首の短歌を作り、以て鬱結の緒を散らさまく

のみ。

三九一一番

あしひきの 山辺に居れば ほととぎす 木の間立ち潜き

鳴かぬ日はなし

三九一二番

ほととぎす 何の心そ 橘の 玉貫く月し 来鳴きとよ

むる

三九一三番

ほととぎす 棟の枝に 行きて居ば 花は散らむな 玉

と見るまで